

特 250

660

作文新編備考

四 卷



* 0049434000 *

0049434-000

特 250-660

作文新編備考

光風館編輯所・編

光風館書店

卷 4

昭和 3

AHJ

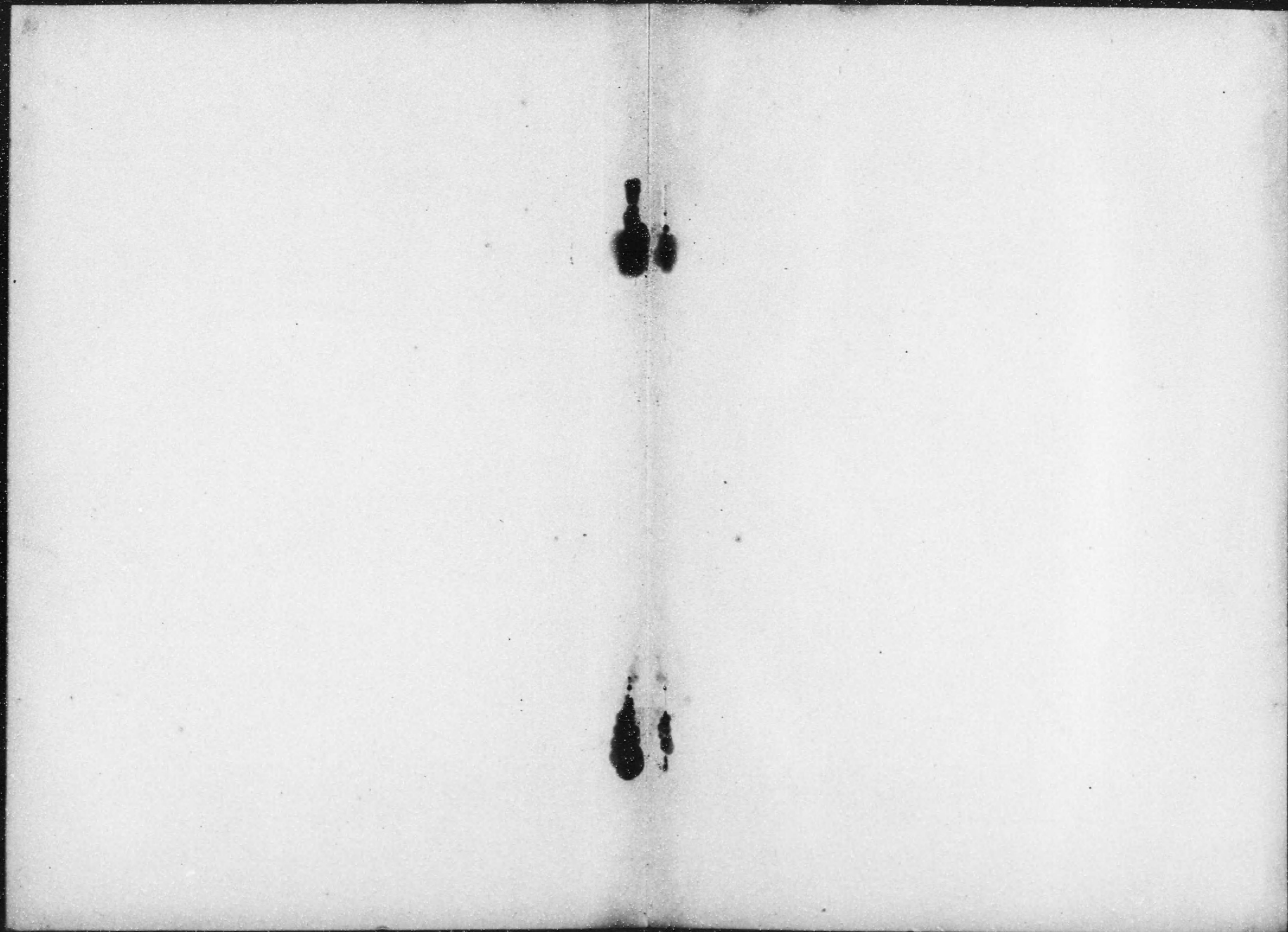
特 250

660

考備編新文作

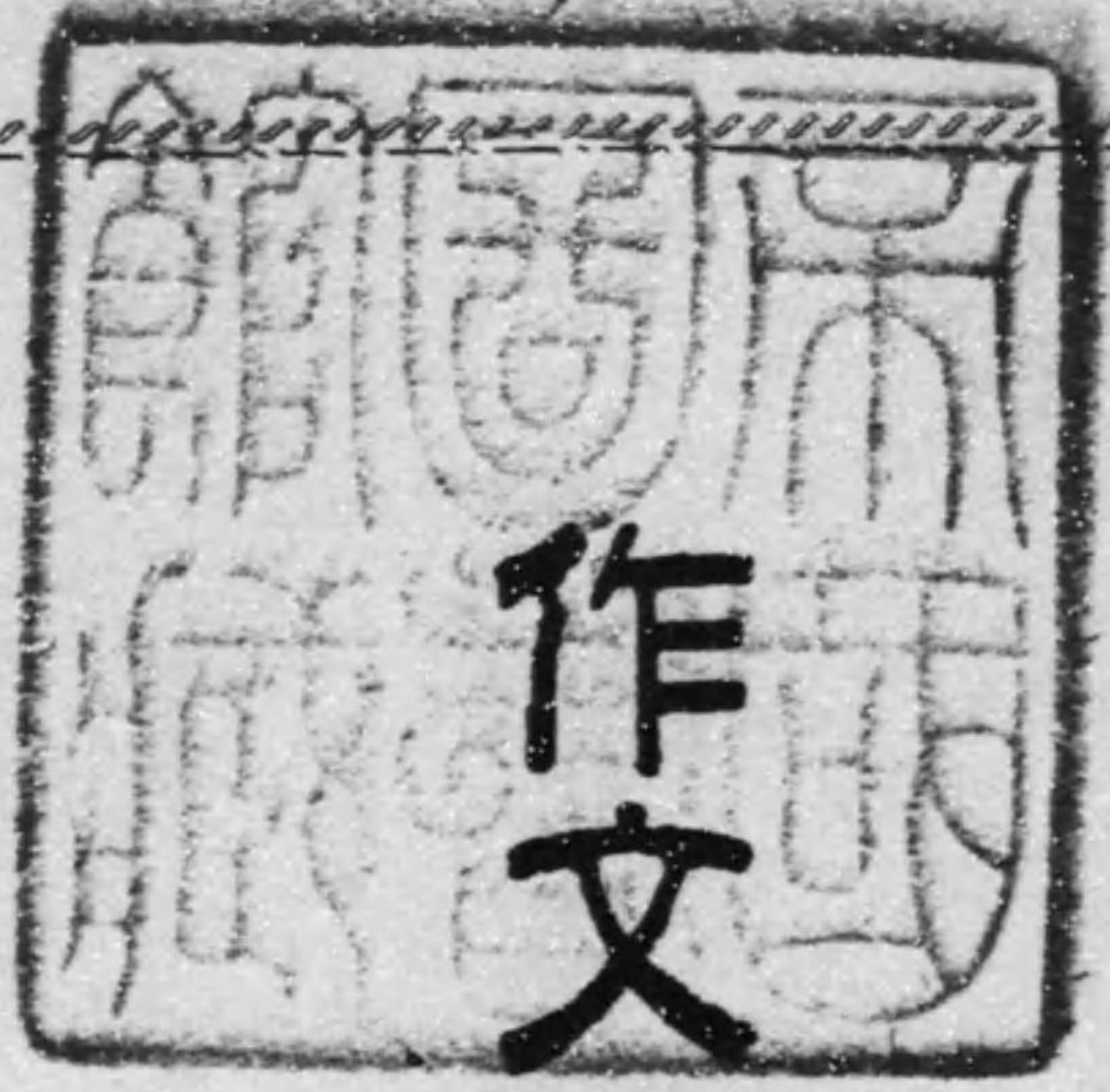
四 卷

京東
行發館風光



特250
660

光風館編輯所編



作文
新編備考

卷四



東京 光風館藏版

作文新編備考 卷四

目次

一 構想	一
二 結構と布置	八
三 擴充	三
四 説明文	一九
五 議論文	二四
六 修辭法(その一)	三三
七 修辭法(その二)	三七
八 修辭法(その三)	四〇

九 修辭法(その四)……………三

一〇 手紙のいろ／＼……………五

六 詩歌

五 漢文

四 漢文

三 漢文

二 漢文

一 漢文

目次終

作文新編備考卷四

一 構 想

要 旨

前卷までは、文章の内容、即ち、思想感情の涵養といふ様な方面の修練を、主として説いて來ました。本卷では、それにひきつゞいてその思想感情を表現するに、どんな徑路を通るか、又同一の思想感情でも、表現の方法によつては、より力強く讀者を感激せしめることは出来ないか、その方法はどうかといふ様な、即ち文章の形式や修辭の方面を主に説くことにいたしました。

一體、生徒は文章の内容を豊富にするといふ努力よりも、貧弱なる思想感情をもつて居ながら、人をあつといはせる様な名文を作らうといふ様な、無駄な努力をし勝のもので

あります。仍つて本書では、形式よりも内容といふ事を、特にやかましく力説して来たのであります。しかし、もう四年生位になりますれば、大凡、思想も定まらませうし、感情も豊かになりませうから、形式の方面の修練といふ事も、一通り試みなければなりません。殊に、極めて短時間で、與へられた文題によつて、文章を求められ、然もその優劣が相當重大な結果を當人に齎すといふ様な場合も生じますから、文章の形式といふ事は決して忽には出来ないのであります。その邊を考へまして、本巻を編輯いたしましたのでありますから、編者の意のあるところを、御汲取り下さいまして、御教授せられる事を希望してやみません。

さて本章で説いて居ります構想といひますことは、英語の *Invention* といひますことで、文章表現の最初の手続きであります。即ち、我々がこれから表現しようと思ひますことについて、その目的に添ふ様に思想感情を系統づける事であります。これに三つの階段があります。即ち、

一、何に就いて記述するか。

二、何處を主眼點として記述するか。

三、如何なる形式によつて記述するか。

といふ三階段であります。生徒の中には文題を與へられますと、何とも考へることなく直に、筆をとるものがあります。かういふ生徒の書きます文章は、多く、つかみどころのない不統一なものであります。これは第二段、第三段の手續をとらぬからであります。又、何を書いてよいかわからないといつて、中々筆をとらないで、苦しんで居りますのは主眼點を見附け得ないで困つて居るのでなければ、その事柄についての思想が貧弱である爲であります。なほ又、表現の形式を誤つた爲に、文章を書きかけたが、すらくすくまないといふ様な場合もあります。かういふ場合には、夫々その生徒に適當な助力を與へてやるやうにいたしますと、中々、平生口で述べます以上の大きい効果があるものであります。

自由選題の場合には、ある種の生徒は、書くべき文題の發見に苦しむことがあります。即ち、第一段の手續に迷ふのであります。これも、僅かに助力いたしますと、易々と書くべき事柄を捉み得るものであります。この邊が作文指導の面白味のあるところで、また困難なところでありませう。

自由作と題作との差異は、第一段の手續きを與へてやるのと與へてやらぬのことにあります。題作は、その文題の出し方によつて第二段の手續きをも與へる場合があります。故に、この兩者はその一方に偏することがよろしくありません。

第二段の手續きは、即ち、作者の作意と稱する事でありまして、作文の場合に、十分之を味つておきますと、讀者の場合非常によい助けとなります。そのことは、最初の松平定信の言葉にもいつてあります通りで、讀書は、作文の逆をゆくものでありまして、最後の目的は、この作者の作意をつかむといふ事にあります。「花の雲、鐘は上野か淺草か。」といふ俳句などになりますと、作者の作意は、文字の上には何處にも現はれて居りません。

ところが平素、俳句を作つて居りますならば、割合に容易に、その作者の作意を捉み得るのであります。作文が、讀書力を養成する上に於て、重要な位置を占めて居る所以はこの邊に在るかと存じます。かういふ氣持も、文章を書かうといふ時の心理状態を研究してゆきますと、明確になつて來ますから、構想といふ様な事柄が案外大切な役目をするのであります。

第三段の表現の形式は、文題及其の主眼點の如何によつて大體定まることでありませう。即ち、その文題を表現するのに、最も適當な形式が選定せられなければなりません。これも、生徒の中には、癖がありましたして、如何なる文題でも、自分の得意とする形式で書きたがるものであります。これは、時には非常に有效な事もありますが、又、その爲に文題を提出した人の意志に添はぬ様な文章を書き上げて、場合によつては、結構でない結果を、作者に齎すことのあるのを、平素注意してなるべく平生の練習には、色々な形式になれる様、教授者に於て、多少の制限を加へることが必要であらうと思ひます。

文章の構想を教授せらるゝ時には、なるべく、具體的の例をあげて、生徒をして考へしめながら、教へてゆかれることを希望いたします。要するにその基礎が定まらなければ、全體が確立することはないのでありますから、この章の御教授には最も力を傾けていたゞきたいと思ひます。

参 考

○作文範に左の様に作意についていつて居ます。

文を作るに當つて、第一に、題意に最も剴切な點を見出して一篇の旨趣を立てるを立意と名づける。即ち、立意とは題意の取り方の謂で、該の文全體の精神主眼となる者である。

例へば、花に就いて文の旨趣を立てようとするには、「花の種類」「花の趣」「花と時候との關係」「花の構造」等、凡そ此等の中で、如何なる者を全篇の主眼として述べべきかと定める如きである。(久松潜一氏)

○加藤咄堂氏著「演說文章應用修辭學」に作文の順序を左の如く説いて居ります。構想とはやゝ縁の遠いことかもしれませんが、参考として結構なものと思ひますからのおおきくおしやう。

作文の順序を示さば、其の第一歩は思想の涵養にあり。思想内に充實せずば、外如何に文字を彫琢すとも、その目的を達する能はざるなり。如何にして思想を涵養すべき。之を外にしては自然の觀察なり。此の觀察疎雑ならんには到底その描寫を充分ならしむる能はず。されど自然の觀察のみが思想涵養の唯一の手段には非ず、之よりも必要なるものは讀書なり、之に志すもの書を讀むことを怠りては、其の思想を涵養すること能はざるのみならず、自ら文字に貧しく、詞藻に乏しく、以て之を成すに足らざるべし。此の讀書と觀察とは外面なり。之を内にしては、冥想なかるべからず。冥想してその觀察したる所を考へ、其の讀書したる所を思ひ、以て思想を統一し、想像を富贍ならしむべし。かくて構想となり修飾となり、組立となる。而して後、更に必要

なるものは彫琢の工夫なり。玉磨かざれば光なし。文も亦彫琢を行はずんば、燦たる光輝を放ち難し。云々

二 結構と布置

要旨

文章を書く場合、構想の次の手続きを結構布置といひます。構想が出来上つて、思想感情、即ち、文章の材料の選擇の手續きを要する時になりますと、初心者は、どの材料もどの材料も捨てしづつて、皆書きたい様な氣持のするもので、その爲に、折角の文章をこはしてしまふ事があります。即ち、材料の爲に文章を作るといふ様な弊に陥つて、文章の不統一を來すのであります。このことは、特に注意すべき事かと思ひます。自分の書き現はさうと思つて居る文章に不必要な材料は、假令奇抜な思想であり、珍らしい考であつても、思ひきつてすてるといふ習慣をつくつてゆきたいと思ひます。この事は

誠に簡単な様であります。中々容易なわざではありません、生徒の中にはたゞ一句の珍らしい文句でさへも捨て兼ねて、自分の文章のどこかに用ひようとするものもあることを考へ合せて、思想をすてることは、生徒にとつては、重大問題であることゝ考へられるのであります。故にこの思想の整理は、相當習慣のつきますまでは、指導してやり、まとまつた文章を書く様に教へてゆかなくてはなりません。

次は材料の配列布置であります。これには、なるべく表を作つて、第一段には何、第二段には何といった様なことを、書きとらせることが肝要であります。即ち、構想以下のことをこゝでまとめるのであります。これを腹案といつて居りますが、作文の場合には、必ず腹案を立てるといふ習慣を養ふといふことは大切なことであります。頭の中で考へたよりも、具體的に書き現はして見ると、一段と明確になつて、表現しようと思つてゐることが、はつきりとして來ます。そしてたらぬ所を補ひ、不要のものを捨て、順序を考へ、首尾を整へるといふ様にして來ますと、文章は自然と統一せられて來るのであ

ります。

但、こゝに注意すべきことは、生徒の中には、先入主となつて、一度作つた腹案は、都合のあしき場合が生じてても、之を改訂しようといふ考の起らぬものゝあることであります。故に、腹案の改修といふことをも、時々試みて、その爲に束縛せられて了ふ様な事のない様にしたいものと考へます。

この文の結構布置の最も巧みに、行はれてゐますものは、支那の文章家に多い様です、漢文の教授の場合には、唯單に、文章の意義のみならず、かういふ作文上の注意を加味せられて、讀書と作文と、相まつて進んでゆく様にしたいものと思ひます。

参 考

○久松潜一氏の作文範に、文の結構について左の様について居ます。

文の結構は、著想を記述するに就いての順序組立、即ち材料の選擇、配列及び章段の組立方である。即ち、材料を精選して、「起首には何」「中文には何々」「結尾には何」

「又、起首と結尾との關係は如何様に」「全文を何段に分つか」等の形式を定めるのである。其れ故、同一の主意及び著想でも、結構が違ふと、文は種々別々の者となつて現はれる理である。

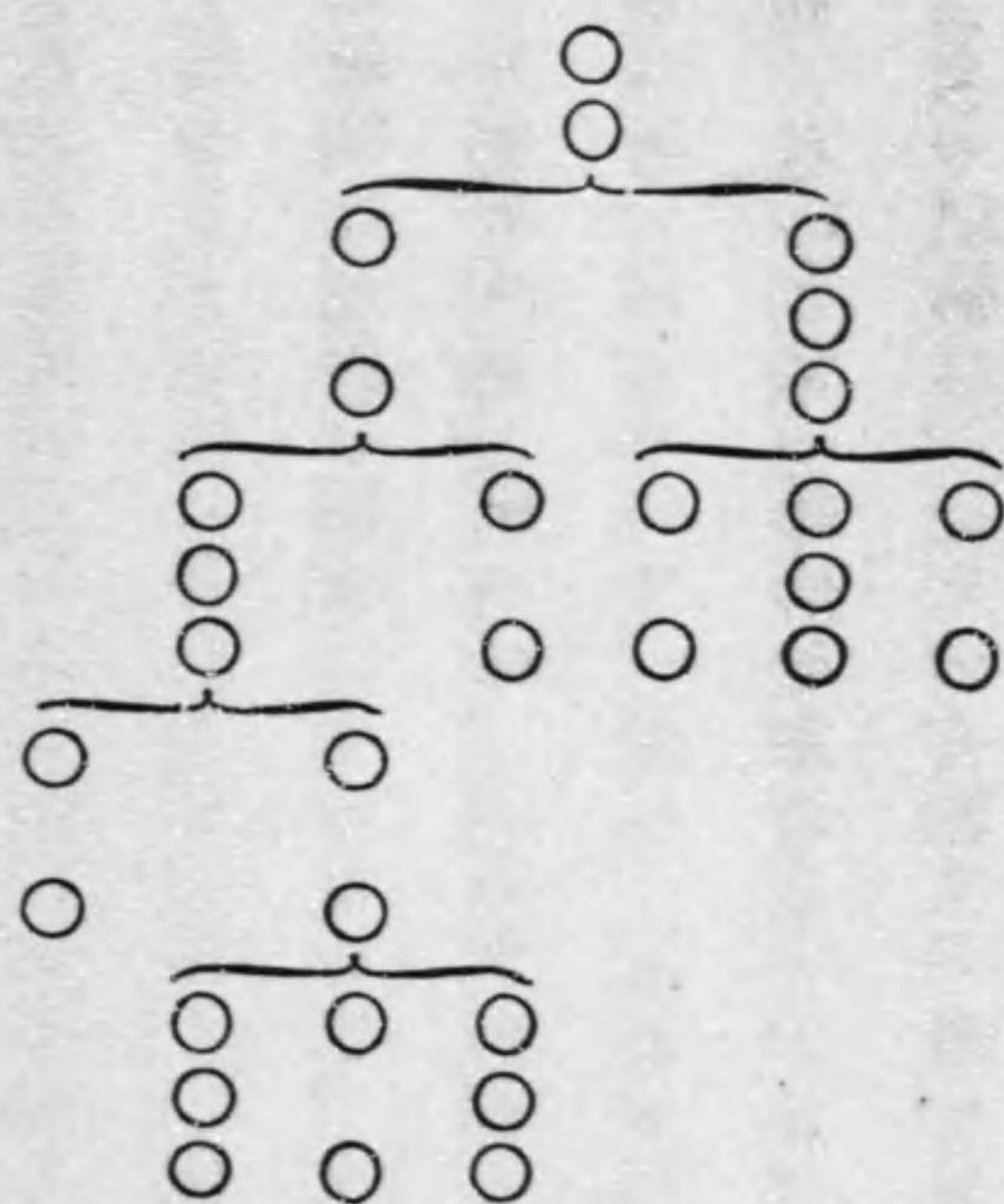
結構の定め方には、一定の形式がなくて、作者の任意ではあるが、注意すべき事は、起首強く結尾弱くて、締りのない、謂はゆる龍頭蛇尾に陥らないやうにする點である。

○また文の結構表といふことに就て次の通りいつて居ります。

短文でも、特に長文では、多くの記述事項を適當に案配して記述の混雜を防ぎ、且系統的に意義を明瞭にするために、文の幹文を明確に定める必要がある。

其の形式は、例へば、次頁例の如くで、此れは記述事項の繁簡、粗密に因つて、おのづから定まるので、要は、記述事項の品彙分類を、系統的に分析、列擧する點にある。之れを文の結構を定めると云ふ。

文の結構は、從來の書翰文の外、定まつた形式がない。併し文の題意、作文の目的、



對者の如何に據つて、其れぐおのづから適當した形式がある者である、さうして、其の形式の定め方の巧拙は、結局當人の平素の作文上の修養に基づくのである。

三 擴 充

要 旨

擴充とは出來上つた腹案に肉をつけること、即ち思想の展開であります。中心となる思想だけ書き列ねても、文とはいへないことが多いのです。それに種々の語句を附加し修飾を施して、然る後一篇の文章となるのであります。即ち直接讀者に示す形となすこととあります。よく生徒の文章の中には自分だけは十分承知してゐるが、讀む方の人には一向内容がはつきりしないといふ様なものがあります。これなどは思想の擴充の不十分な結果であります。誰が讀んでもわかる様にといふ事を心掛けねばなりません。手紙の様なものでもあります。相手が定まりますから、相手にさへわかればよろしい。併し一般の文章はそれでは不十分であります。相手はいつも廣い天下の人々であることを考へてゐなくてはなりません。これは文章を書く人の常に氣をつけなくてはならぬ點であります。

以上述べて來ました構想といひ、結構布置といひ、またこの擴充といふ様な事を生徒に教授せられる時は、なるべく、具體的の説明、即ち、實例を以て説明してゆかれた方

が、十分よく生徒の脳裏に入りこむことであらうと考へられます。教科書にもその意味から、やゝくどい様でありましたが、實例をあげた様なわけであります。なほ御教授の便宜の爲、次に二三の文章をあげておきますから、之を逆に使用して、構想以下の諸項の説明に御利用下さい。又生徒をして考へしめて下さい。

参考

○途上小景

靖國神社參拜の途上である。朝早いのに電車は可なり込んでゐる。而も七十パーセントは泥のついた印半纏の労働者である。誰一人として話をする者は無い。有つても小声でのヒッ、ヒッ話で、電車のみが大きな聲でわめいて居るやうだ。

四谷見附の所でキュと云ふ軋りの音を立て、電車が廻り、程なく停つた。窓越しに朝霧のうづまいてゐる中をさがす様にして見ると、向側の土手や松がボウツとして、實に神祕的な感にうたれた。何故ならば、恰も自然の神が、總ての景色を薄ら隠してゐる様な氣がしたから。

る様な氣がしたから。

尙よく見ると、今工事中の土手の上に二三枚の藁こいが落ちてゐる。よく目だつたので見つめてゐると、忽ちゾツクとした。其は唯單なる藁ではない。其の下には頭と手足が見えるのではないか、恐らく彼等は一日中仕事を見つけて歩いたに違ひない。そして何も得る事は無かつたのだらう。そしてあの様な所に寝てゐるのだらう。此は彼の罪ではない、社會の罪なのだ等と考へても見た。

グット電車の動くショックを感じた。霧は流れてゐる。

○國民性

我々個々の人間が夫々個性を持つてゐるやうに、個々の國民も亦夫々の個性を持つてゐます。これが國民性と名づけられるものであります。

この、國民としての個性、即ち國民性は、どうして生じどうして成長するものでありませうか。それは言ふ迄も無く一國の氣候、風土、環境、國民生活の傳統等の條件に支

配されて徐々に形作られて行くものなのであります。

英國の常識的な端正、獨逸の粘着力ある堅實、米國の淺膚安直な物々しさ。或は又白樺の木下闇のやうなロシアの陰鬱、葡萄畑の夕映えのやうなフランスの明快。これらは皆上述の諸條件によつて必然的に導き出されたものに他ならないのであります。

凡て一國の政治、産業、學術、宗教、藝術の何れを問はず、あらゆる文化を産み出す可き原動力は必ず深くそれ自身の國民性に根ざしてをり、國民性に立脚しない文化現象は斷じてありえないのであります。ありうると見るのは、はかない一時の流行的現象を眞の文化現象であると思ひ違へてゐるに過ぎません。近頃の我が國の世相を眺めますと、この思ひ違ひがかなり少くないやうに感じられはしないでせうか。

我が國民は古來所謂大和魂の所有者として誇つて來ました。忠君愛國、清廉潔白、堅忍不拔、優雅枯淡、これらが大和魂を形作る重要な要素でありませうが、この麗しい國民性を明確に自覺し、徒らな模倣から目ざめて、國民性それ自體に立脚する眞に新しい文化

の創造こそ、我等新時代の青年に課せらるべき唯一の務でありますまいか。

○共存共榮

如何なる時代、如何なる國土に於いても、極端なる利己主義が永く榮えたためしはない。如何なる人でも、本然の至情が心中深く醒めて來た時に、隣人を愛する事を思はぬ者はない。いつたい我等は社會と孤立して生活する事が出来るか。一日として社會の恩恵を蒙らぬ事はないであらう。即ち自分一人の力で生活してゐるのではないのである。然るに若し自分だけの福利を求めて、他人の福利を顧みず、他人の困窮を感む事を知らなかつたなら如何であるか。義理を知らず人情を辨へずして、ひたすら私利のみを營んでゐるとしたら果してどうであるか。人面獸心といふのは、かゝる者をいふのである。

同じく坤輿の上に國を立てゝゐるものである。然るに或る國は廣大なる國土を擁して人の勢きを憂へてゐる。或る國は國土狭小で人口の多きに苦しんでゐる。しかも、人勢き國は國境の障壁を殊更に高くして、人多き國より移住する者を拒んでゐる。この場合

前者の態度は横暴といはねばならぬ。非道といはねばならぬ。

個人の間でも、國家の間でも、他の惱めるやうすを見て、少しも意に介しないといふ事は、人類道に外れて居るではないか。苟くも人間であるならば共存共榮の何たるかを理解しなければならぬ、困窮相救ふ事は、實に社會の通義である。忍びざる心を推して、無告の民を救ひ、自他共に共存繁榮の目的を達する事は、人類同胞相互の最大責務ではないか。

今や昭和新政の時代となつた。謹んで朝見式に下し給うた御勅語を拜すると、舉國共存共榮を之れ圖るべきやう仰せられてある。これこそ勅聖文武天皇陛下の至大至高なる御仁徳の御發露である、と拜察し奉るのである。共存共榮、新時代に於ける國民の奉ずべき標語は、此の語を措いて他にはないではないか。

曾て横井小楠は大義を四海に布かん事を我が國民の理想とした。然らば今日の大義として四海に布くべきものは共存共榮であらねばならぬ。我等は此の大義を先づ我が國內

に實現して、同胞益々和親協力し、進んで世界に之を及ぼすの大いなる抱負がなければならぬ。

四 説明文

要旨

普通我々が書きます場合でも、純粹の説明文と稱するものは、割合に少いもので、多くは次に説きます議論文と混合してゐるものであります。説明文には作者の意見が加はらない即ち、作者の「自己」をぬきにした文章であります。こゝが、中々説明文のかきにくいところであります。併し、昨今上級學校の入學試験などに出されます文題は、この説明文として書かなくてはならぬといふ様なものが中々多い様に見うけますから、その方面からも、この文章に多少の力を傾注したいと考へます。

参考

○佐々政一氏著「中學作文講話」に、説明文について左の様にあります。

事物を解釋し、又は文章の意味を説明する文章も、記事文の一種に數へても差支はない。初年級では、他の記事文と區別する必要はないが、諸子の程度にあつては、よくこの區別に通じて普通の記事の外に、説明文の構造をも、熟知しておく必要がある。さて説明文とは何のことかといふと、一切の理解し難い事物、又は知らない事物をよくわかる様に教へる時に用ひる文章である。だから先生が教場で生徒に話す講義を筆記すれば大抵説明文になる。私の今書いてゐるこの講義も、多くは説明文である。だから説明文といふと、その種類は極めて多いのであるから、まづその最も簡単な形から説く事にしよう。

最も簡単なものは、物の説明である。例へば、「書物とは何ぞや」「手紙とは何ぞや」といふが如き問に答へる文章である。かゝる種類の説明文には如何なる要件を具へなければならぬかといふと。

一、種類 即ちそれは如何なる種類に屬するかといふこと。

二、特色 即ちその物が、同種類中の他の物と異なつてゐる點。

三、分類 今説明する物が、世界に唯一つしかない物に非ざる場合には、大抵様々な種類がある。従つてその分類を示す必要がある。その分類には又様々の分ち方があるものであるから、必要に應じて、これをも記さねばならぬ。すべて分類には、何を標準として分つたか、といふことを記しておかねばならぬ。

四、實例 分類の後には實例を加へるがよい。

五、對稱と疑似 對稱とは全く特質の相反するもので、少し似てゐて、その分類であるかとも疑はれるものゝことである。それをも書いておくと彌々解釋が明白になる。

○また

條件の完備した説明文の外に、又時と場合とによつては、各種の條件中の一つか二つのみ擧げることもある。例へば、

(イ)筆とは、文字や繪などを書く時に用ひる文房具である。

(ロ)筆とは、鉛筆、鐵筆、石筆など、色々の種類もあるが、普通には獸毛を束ねて竹の軸につけたものを云ふのである。

(イ)は廣い意味の筆の説明で、後のは狭い意味の筆の説明である。だが、(イ)の方は、大抵の場合には、言はなくともわかつてゐるから、實際上に用ひられる説明文は多くは(ロ)の様な形である。だから、説明の文を作らうとするには、前章に記した様に、各種の條件を具へた、十分綿密な説明を作つておいて、その中で、わかりきつたことを省略すれば、自ら立派な説明文が出来るわけである。

説明にはまた、讀者の熟知してゐる事物に比較して、その事物と同様な條件はこれを省略することもある。

○加藤咄堂氏著「應用修辭學」に次のやうに記してあります。

解説の文は或る事物を説明して讀者をして充分に理解せしむるを目的とし、其の要は難解のものを平易に曖昧なるものを明白にするにある。科學的の書籍、法律の註解、經文の解釋、其他講義筆記等は悉く此の類にして、此の文體に於て最も必要なるものは明晰にあり。明晰にあらずんば解説の效なし。若し解説の文にして不明晰なるものあらんか、これ其の本來の目的に背反するものなり。如何にして明晰ならしむべきか。それ第一篇に説明せる所の諸種の心得に依據せざるべからざるはいふまでもなし。就中、言語の數を多く知りて、同一事を反復するに異なれる言語を以てすること巧みに練習せば、讀者をして重複の感なくして、しかも明晰に理解せしむることを得べく、殊に其の文字も平易なるを選び、感情に訴ふる如き語句を避け、省筆等は努めて之れを用ひざるを可とす。されど、無用なることをも、くどくしく説明せんは却つて明晰を害するものなれば、主想以外のことは成るべく之れを省くべきことをも忘る

べからず。簡明にして能く理解せしめ得るものならば、それは此の文の上乗といふべきか。

五 議論文

要旨

議論文は説明文と同様、理の文であります。説明文より更に進んで、読者をして自己の意見に服従せしめようといふやうな文章であります。故に、説明文その他でも同様であります。特に議論文では、その題目に對して確かな意見をもつてゐなくてはなりません。さうでないといふと反對者の駁論に直に挫折する様な結果を來します。それと同時に推論の運び方、論者の誤謬といつた様なことを研究しまして、立論上一點の曖昧な所、誤謬などのない様に注意をしないでなりません。併しながら、あまりに推論の形式にのみよると索然たる文章となつて、却つて読者に感銘せしめるところが少くなります。

こゝに修辭といふことなどの必要があるのであらうと思はれます。議論文は、漢文の中に名文が多いと思ひます。就いて参考せしめる様にしていだゞきます。

参考

○佐々政一氏著「中學作文講話」に命題について左の様にあります。

命題とは、斷定を文章にしたものである。だからそれは次の(イ)と(ロ)との形の中

のいづれかでなくてはならぬ。

(イ)何は何なり

角力は廢止すべきものなり。

西郷隆盛は惡人なり

肯定命題

(ロ)何は何にあらず

角力は廢止すべきものにあらず。

西郷隆盛は惡人にあらず。

否定命題

○又、證明の方法について次の様にいつてあります。

證明の方法には、二つの種類がある。一つは直接の方法で、今一つは間接の方法である。

直接の方法といふのは、例へば、「某は善人なり」といふ命題に對して、その人の善きことをした事實を、證據として擧げるが如き方法をいふので、

某は孝行であつたから、府廳から褒美を與へられた。(證據)

某は友人に親切であつたから、友人が今でもこれを慕つてゐる。(證據)

だから、某は善人である。

といふ類がそれである。

間接の方法とは、例へば、「某は惡人なり」といふ命題に對して、

某が善人であるならば、親に不孝である筈はない。然るに、彼は不孝ものである。

だから他にどんな善いことをした證據があつたところで、彼は善人と云ふのは間違

である。

故に、「彼は惡人なり」と云はねばならぬ。

といふ様に、反對説が間違であることを證明して、間接に證據立てる方法である。

この間接證明法は、他人の説を反駁する時などには、甚だ便利なことが多い。

○また演繹法について左の様にいつてあります。

汎い意味の命題を基にして、狭い意味の命題を證明する議論を演繹法といふ。例へば、

あらゆる人類は必ず死すべし。

某は人類なり、

故に、彼は死すべし。

といふが如く、「あらゆる人類」といふ汎い意味の命題、即ち断定から、「某」といふ狭い意味の一箇人のことを推斷するのが演繹である。この方法によつた議論は、常に、

右の例の通りに三段から成つてゐる。故にさういふ形式の議論を三段論法といふ。さうして其の第一段を大前提といひ、第二段を小前提といひ、第三段を結論といふのである。

論理上の演繹法は、必ずこの通りの形であるべき筈であるが、文章や談話には、その順序を變じて、

あらゆる人類は死すべし。(大前提)

故に、某は死すべし。(結論)

何となれば、某も人類なればなり。(小前提)

といひ、或は

某も人類なり。(小前提)

故に、某は死すべし。(結論)

あらゆる人類は死すべければなり。(大前提)

といひ、或は又、

某は死すべし。(結論)

何となれば、あらゆる人類は死すべきものにして、(大前提)

彼も亦人類なればなり。(小前提)

某は死すべし。(結論)

何となれば、某も人類にして、(小前提)

而して、あらゆる人類は死すべければなり。(大前提)

などともいふ事が出来る。

加之、各段中のある段が、前後の関係よりして、殆ど自明なる場合にはこれを省略することがある。

あらゆる人類は死すべきが故に、(大前提)

某も亦死すべし。(結論)

某も亦人類なるが故に、(小前提)
死すべし。(結論)

の如く、その前提のいづれをか省略することは極めて普通である。時とすれば、その結論を省略して、

一切の人類豈に死なからんや。(大前提)

而して、彼も亦人類にあらずや。(小前提)

とだけいつて、十分に意味を通じ得ることもあらう。されば普通に文章の上に顯はれる演繹法は、大抵、順序の轉換せられ、或はその一部分の省略せられたるものであるから、自己の議論を精確にするが爲にも、或は反對論者の議論の缺點を發見するが爲にも、先づこれを三段論法の形に改めて見るのが便利である。而して、過誤は多く、前提の薄弱といふことから生ずる。

○又、歸納法について、

歸納法といふのは、狭い事實、即ち一つ一つの場合に起つた事實を澤山に集めて、それを證據にして、一般的な汎い意味の斷定を下す方法である。例へば、「孔子も死せり。釋迦も死せり。ソクラテスも死せり。近くは、我々の先祖も、隣の爺も向の婆も皆死せり。あらゆる偉人も凡人も、我々の知れる限に於ては、年を経たる者は悉く死せり。故に我々の知らざる人類も、皆死せしものなるべく、未だ死せざる人類も、何時かは死するものなるべし。」と推定して、「あらゆる人類は死すべし。」と斷定するが如きものを歸納法といふのである。

かく見聞の及ばぬところを類推するのであるから、歸納といふものは、必ずしも疑のない極めて正確なるものであるとはいはれない。就中、

一、原因結果の關係のわからぬ歸納論は正確でない。

二、證據とする事實の数が十分なくては正確でない。

といつてあります。なほ詳細は論理學を研究しなくてはなりません。

○加藤咄堂氏著「應用修辭學」に、

議論文は解説の文と相隣す。解説の文は作家いふ所を讀者に理解せしむれば足るべけれど、議論の文は單に理解せしむるのみならず、其の主張する所を信せしむるにあり。されば解説の文は解釋し了れば、其の目的を達したりといふべけれど、議論の文は證明し了らざるを得ず。

六 修辭法 (その一)

要旨

修辭法はその一般知識を生徒にあたへるに止めたいと思ひます。なまなか、之を作文上に應用すると、精神のない文章、文字の遊戯に終る様な弊に陥り易いからであります。本書に於て主として精神に重きをおいて、形式を從にして居る所以であります。併し、同一の思想感情を、より強く讀者に感銘させようといふことは、この修辭によらなくては

なりません。その意味に於て一般の知識を與へておく必要があると思ひます。形式の上から文を整へるといふことは、讀者に對しても快感を與へることでありませぬ。但し、やたらに修辭を行ふと不自然になり、嫌味を生じます。故に、修辭そのものも、自然に内から迸り出るやうなものでなければなりません。蘇東坡の「赤壁賦」を讀んで我々はよい氣持になります。全く羽化登仙する様な恍惚感を得ます。言ふまでもなく巧みな修辭の力があります。しかし、また萬葉集と新古今集とを比べた時、我々は修辭の弊を考へさせられます。要は中庸をゆかなくてはならぬのであることを、くれぐれも生徒をして承知せしめてほしいと思ひます。そして修辭は理窟ではだめである。名文を多讀して、自然に會得することである。多作して、自然に行はれる様に練習することであるといふことを了解せしめていたゞきたいと思ひます。以下參考になる様な文句をあげて見ませう。

参・考

○省略法について

文章に限らず藝術に於いては、すべて勢力材料を浪費せぬことが必要であります。フランスの或る聲樂家が唱歌の呼吸を説いて云ひました。「唱歌を稽古する者は、先づ氣息を無駄費ひせぬやうにせねばならぬ。氣息を無駄に費ふか費はぬかを驗するには、蠟燭を點し、その直ぐ前に口を開いて高く歌うて見るがよい。下手が歌へばすぐに消えてしまふ。多少の修業の積んだ者が歌ふと、消えはせぬが焰がゆらぐ。それが名人になると如何ほど高く發聲しても焰が少しも動かぬ。其の理由は名人の吐き出す氣息は、悉く音聲に化してしまふ故に火にあたらぬが、下手の氣息は氣息のまゝ即ち空氣のまゝで出る故に、風となつて火を消すのである。」と云つて居ります。

童幼に見せる文、達意を主とする説明文ならばとにかく、趣味本位の文學的文章に於ては、有る限りの材料を並べるよりは、寧ろ、中心になる感想のみを顯はして、之れに附屬する小感想をば讀者の想像に一任する方がよい。文章に要とする例は、臚列するにあらずして、暗示するにある。細大舉げ盡すにあらずして、根幹を示して枝葉

をほのめかすにある。言ひ換ふれば、讀者が骨折らずに想像で補ひ得る程の事は、わざと省略して言ひ表はさぬことが、文章に力あらしめ、含蓄あらしめ、餘韻あらしめる一つの秘訣である。(五十嵐力氏著「修辭學講話」)

○倒置法について

倒置法は又倒裝法、倒敘法、換序法といつてもよい。文法上論理上普通なる句作りの順序を倒まにする修辭法である。感情が高まつて普通平生の言ひ表はし方をなし得ぬ場合を寫すに適した方法で、述部を前にし、主部を後にする方式が最も多く行はれてゐる。(同上)

○疑問法について、

設疑法は容易に下し得べき結論を、わざと疑問にして讀者に判斷せしむるもの、言ひ換ふれば、豫め結論に到達すべき道を作りおき、讀者をして自分の力で其處に進み入らしむる文飾である。此の法の面白味は知れた事を言はずにおいて、言ふに優さる效

果を収むる所、讀者の心に活動の餘地を與へて快く考量し解答せしむる所にある。それ故設疑法に於て掲ぐる疑問は難解の疑問にあらずして。容易に決し得べき疑問でなければならぬ。(同上)

○詠嘆法について

人は、切なる思が胸に満ちて之を語り得ざる時は、之を詠歎の聲に漏らし、之を語りて盡くし得ざる時は、添へるに詠嘆の語を以てする。詠嘆法は此の人性の上に立つ詞姿で従つて常に深き、高き、強き、激しき感情を表はす爲に用ひられるものである。此の法の形式は一樣でない。或は平叙文の最後に「あはれ」「あゝ」「かな」「かも」「や」「よ」等の感投の詞を添へたものもあり、主語、述語、客語より成る通常の形式によらずして、詠嘆の語のみから成るものあり、又疑問式にして詠嘆の實があるものもある。「此の花の思ふことなげに美はしき哉。」「賢なる哉、回や。」の如きは第一の例、「人知れぬ思ひ哉。」「詛ふべき世の中よ。」の如きは第二の例、「天道は是か非か。」「等しきものなどて脆き。」の如きは第三の例である。(同上)

七 修辭法

参考

○引用法について

△時は平凡なことをも神聖にします。同じ言でも古人のとあれば今人の前に君臨する趣があり、祖先の事蹟は子孫の前に神さびて現はれます(中略)

子供が師父の言葉を恐れ入る心を利用し、古語古事を引いて、文章に品位をつけ、趣味を豊かにする修飾法、之を稱して引用法と申します。(五十嵐力氏著「修辭學講話」)

△引用法は文意を確實にし、文勢を雄健にし、又、文容を美しくするに其の效力頗る大きい。併し、濫用する時は本文に權威を失はせ、宛も、引用語のための本文であるかの如く主客轉倒の者となる事がある。(久松潜一氏著「作文範」)

○對照法について、

△こゝに貧しくして独立自主の精神を失はぬ青年があり、其の心を述べて「人様の御厄介になつて赤い顔をして居るよりも、自分一人でやつて青い顔をして居る方が餘程氣持がよい。」と云つたとする。之を見ると文句といひ思想といひ、いかにも面白い。何故かといふにその主なる理由は、清貧濁富、赤い青いといふ對照が面白く現はれて居るからである。(中略)

大小、高低、遠近、黑白、明暗等は、引き離して考へることの出來ぬ事物の兩端である。人の心は大なるもの、高きもの、遠き物を思はず、小さき物、低き物、近きものを考へることが出來ぬ。而して反對した事物を並べ掲ぐれば、兩々互に映發して大いに強さ、鮮さ、面白さを増すものである。(中略)

人の心の此の傾きのあるのに投じて、性質の相反したる事物を並べ掲げる詞姿を對照法と申します。

對照法には語の上にだけ對照のあるものと、思想に對照のあるものとがある。而して對照法の上乗なるものは後者であることは云ふまでもありません。(五十嵐力氏著「修辭學講話」)

△對句法とは語調の相類似した語句を對用して、物の併行、對立に因つて起きる美感を生じさせ、同時に、文に一種の齊整の緊張味を添へる事を云ふ。

對句は、二句以上、幾句でも制限なく、又對句中に對句を作る事もある。併し、二句對を普通とする。(久松潜一氏著「作文範」)

△警句法は、人の意想外の眞理を含んだ語句を用ひて、文を奇抜にし、讀者に大なる感興を興させる法である。

この法は、語句の奇抜と意義の深長とを上乗とするので、此の特徴のない語句は、反つて使用しない方がよい。(同上)

八 修辭法 (その三)

参考

○比喻法について

△比喻法に明喩法と暗喩法とある。「喩へば」「宛も」「似たり」「如し」等の語を用ひて、明らかに比喻である事を示したのは比喻法で、又、直喩法ともいふ。又、其等附屬の語を用ひないで、隱然、比喻を用ひたのは暗喩法で、又、隱喩法とも云ふ。

此の法の使用は、抽象的の叙述、又は深遠な議論、解説、又は對者の愚蒙な場合には、甚だ有效な者である。併し比喻は飽くまで比喻であつて、只、文の本旨を闡明する助にだけ使用するべき者であるから、主従の權衡を轉倒させ、比喻に重きを置くやうな作法と、比喻の重用は、固く誠むべきである。

隱喩の一種に、比喻を以て諷刺をする者がある。之を諷喩と云ふ。此は教化、諷刺、

又は自説の婉曲な主張などに用ひて效多い者である。(久松潜一氏著「作文範」)

△諷喩には第一、單に類似した事實を擧げるだけのもの、第二、實際あり得べからざる事を假作して之に本義を含める者、第三、實際あり得べき事を假作して之れに本義を含めるものなどいろいろあります。(五十嵐力氏著「修辭學講話」)

△此の三式の譬喩の中、直喩は形式が素直で單純なだけに、一番使ひ易く、技巧を要することが最も少く、従つて何人が用ひても危氣がありません。隱喩は一桁はづした譬喩だけあつて、用ひ方に多少の呼吸があり、穩かな比喻でも、言ひ表はし方が不自然だと、まるで物にならぬ場合が往々あります。最後に手心の一番むづかしいのは諷喩で、これには言はずして而も云うたよりも明らかなるやうに、不透明體を用ひて、而も陰なる本體の明らかに辨へらるゝやうに、人の氣に障らすして、而も其の心にしみぐと感せられるやうに、などいふいろゝの注意があります。(同上)

○擬人法について

擬人法は生命の無いものに生命を與へ、動かぬものを動かしめ、言葉なきものに物いはしむる文飾、言ひ換ふれば、無生物を生化し、下等動物、或は精神作用等を人間化する文飾であります。此の法の最も簡單で程度の低いのは、單に無生物に生を與へるもの、或は低級なる生物に高級なる生物の働きを與へるもので、最も進んだものは、無生物、植物、動物、精神作用等に言葉を與へ、物語せしめるものであります。(同上)

九 修辭法 (その四)

参考

○疊語法について

此れは、感情の迫つた際に、或は事物を念入りに述べようとする時に、同一類の語が引續き、或は語句を隔て、現はれる形であつて、爲に、大いに文勢の雄健になる法である(久松潜一氏著「作文範」)

○反覆法について

芽出度い事、芽出たからぬ事、うれしい事、悲しい事、面白い事、奇妙な事、すべて深く人の興を引き情を動かすものがあれば、一度云ふ丈では満足せず、再び三たびも繰り返して、其の深い興味感情を傳へんとするのが人情である。反覆は感情興趣の深さ、高さ、烈しさ、大いさを傳へると共に、反覆その事が一種の美を人に感せしめる。語句の反覆が人に面白味を感せしめるのは、並行した直線、曲線、或は並樹、行列などが人を喜ばすのに異なることがない。(五十嵐力氏著「修辭學講話」)

○漸層法について

△漸層法は語句思想を次第に強く、大きく、高く、深く按排する修飾法で、謂ゆる一級高一級、一步進一步の法である。この法は演説に於ける論陣の布き方などに應用して殊に効果があるものである。(同上)

△漸層法は人を勧誘折伏するに、大效があると共に、人を誑しそゝのかすにも驚くべ

き効力がある。通常の言ひ表はし方では齒牙にも掛けられぬほどの暴説暴論も、漸層の形を取れば、往々にして人を感奮昂激せしめる。(同上)

○誇張法について

△此は事物の性質、状態、動作等を極めて過大に言表はす修飾法である。此の法は文に一種の美趣を興へる效はあるが、誇張に過ぎる時は、動もすると、輕薄、滑稽となり、且文の正確を失ふ者であるから注意を要する。又解説文には性質上用ひないが良い。(久松潜一氏著「作文範」)

△事物を實際より誇張して、文辭を修飾するものにして、こはもと吾人の感情の激越せる時には、知らず識らず事物を誇大にする自然の性情より出でたるものにして、謹嚴なる文章には用ふべきにあらねど、感動を主とする詩歌、演説に於ては其の效少からず。(加藤唯堂氏著「應用修辭學」)

一〇 手紙のいろく (鑑賞)

要旨

生徒は手紙といふと、多く之を嫌ひ、固くなるものであります。併し、文章の最も手近なものは手紙でありまして、我々は一生この手紙を書くことから免れるわけにはありません。仍つて手紙を書くことが、何でもないとはいふ習慣をつけてゆきたいと思ひます。で、機會があつたら手紙を書くことをすゝめて戴きたいと思ひます。一方、立派な手紙の文に親しんで、そのうまみのあるところを會得させなくてはなりません。そんな意味で、本章には數篇の手紙をあげました。そして生徒をして十分鑑賞せしめたいと思ひます。

作文新編備考 卷四終

昭和三年十二月十五日印刷
昭和三年十二月十八日發行

作文新編備考ノ四

非賣品



編者 東京市神田區通神保町六番地
光風館編輯所

印刷者 東京市神田區通神保町六番地
上原才一郎

發行所 東京市神田區通神保町六番地
光風館書店
(電話 神田三〇八七番
攝替口座東京三〇二七番)

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

大正十五年二月十日
文部省檢定濟

昭和三年九月二十八日
文部省檢定出願

大正十五年五月二十五日
文部省檢定濟

中國文教科書
國文讀本
現代文新鈔

洋裝全十冊
洋裝全十冊
洋裝全五冊



320
2.19

